

自然あそびの場づくりから里山再生へ

京都市宝が池公園プレイパークの運営を通して

公益財団法人 京都市都市緑化協会 野田 奏栄

1. はじめに

里山は、四季の景観、身近な生物の生息・生育空間、恵みを収穫する場として日本人の暮らしや文化に深く根付いていた。1990年代、里山の荒廃が社会問題になるとともに、里山が持つ環境学習・体験学習フィールドとしての役割や、温暖化抑制、生物多様性の維持といった環境維持に果たす役割が認識されるようになった。都市では、地域内に残る雑木林（かつての里山）を取り込んだ「里山型公園」が設けられ、里山の管理活動を行いながら、地域の子どもたちを招き入れ、森の中で遊んだり、稲作・草刈り等を体験したりするためのプログラムが提供されるようになってきている。さらに近年では、里山環境を利用した「森の幼稚園」も広がりを見せている。

一方で、私が運営に関わっている里山型公園の雑木林では、多くの地域と同様、ナラ枯れやシカ食害による森林劣化が顕著となっている。その影響で倒木や土砂崩れが起りやすくなり、利用者のみならず、森林周辺の民家の安全性に対するリスクが高まっている。こうした課題を解決し、健全な里山を回復・維持するためには、林内の木の利用を含め、適度な伐採管理によって遷移を調整する必要がある。

市民団体等が自主的に保全活動を展開している各地の里山では、樹木伐採を含めた管理作業が行われており、その作業はレクリエーション活動の一環としても捉えられる。一方、都市公園としての里山型公園にやってくる人は、里山に対する想いを持っている人たちばかりではなく、里山とはどういう生態系なのか、また、どのような現状なのかも知らずに来る人が多い。そのた

め、里山型公園は、都市住民に荒廃した里山の現状を伝え、回復のための活動につなげていくための入口としての役割を果たすことが重要だ。環境教育・自然学習の機会を提供しながら、雑木林の生態系サービスを得る公園利用者自身が、楽しみながら管理活動を行うしくみを創っていくことが不可欠であろう。

このような考えを持って、私は里山型公園である京都市の都市公園「宝が池公園」に設置されたプレイパークの運営を手伝い、森一川一池からなる里山の一体的環境を活かして子どもたちを招き入れる取り組みに注力している。プレイパークとは、1950年代頃からヨーロッパで普及してきた子どもの遊び場の形態で、予め設えられた遊具や遊びの形に縛られることなく、子どもたち自身のアイデアとスタイルで自由に発想し改変を加えながら楽しみ、発見し、創造する喜びと達成感を得られるよう皆で創っていく遊びの空間であり、「冒険遊び場」とも呼ばれる。日本では、都市公園での行動に制約が強くなる中、1980年代以降、お仕着せのルールや規制のない場所で子どもたちを遊ばせたいと考える大人たちが、各地で展開し始めた。そして、都市公園の一角を独自の基準で管理運営し、それを行政がサポートする形でできてきた（野田 2013）。

宝が池公園のプレイパークは、そうした運営形態の遊び場で（野田 2013、野田・小川 2014）、小学生以下の子どもとその保護者のみに開放されている「子どもの楽園」内にある。小学3・4年生までの利用が多いため、子どもたちが遊びを通して楽しさや感動を体感し、自然への理解を深めていけるよう「自然あそび教室」を実施している。そこで、そうした活動を入口に、かつての里山に見られた利用と一体となった管理モデルを構築し、周辺の森林全体の再生につなげていくことをめざしている。

本報告では、そこでの自然学習の理念や具体のプログラムとそれを支える人・組織のネットワークの広がりについて具体的に紹介し、環境教育を入口とする里山管理活動への展開のあり方について考えを述べる。

2. 宝が池公園プレイパークでの「自然あそび教室」

(1) 自然あそびの理念

「自然あそび教室」は、これまで自然に興味がなかった来園者が自然に目を向けるきっかけともなるよう、誰もが気軽に参加できるようにしている。同時に、継続参加を促し、里山環境の中で楽しみながら様々な体験を重ね、遊びを入口に、地域で培われてきた文化の理解にまで広がっていくことを目標としている。そのため、プレイパークに隣接する森一川一池の一体的な活用と、多様な人と連携していくしくみづくりを重視し、プログラムに反映させている（野田・小川 2014）。また、引き継がれてきた里山管理の手法やその背景にある科学的根拠を大事にしており、京都府立大学等の研究者と協働で雑木林の状態を調査し、維持管理の方法を考え、その知見も取り入れている（野田 2013）。

自然あそび教室の運営理念は「循環型の管理」だ。それは二つの柱からなっている。一つは「活動の循環」、すなわち自然への働きかけによって、生物の棲み場の多様度が上がり、豊かな自然との対話が可能になり、観察や探検の場としての魅力も向上するという。もう一つは「生態系の循環」、すなわち落ち葉や枝を集めて、燃料や生物の棲み場として使い、自然の産物が土に返るといったこと。こうした理念に基づくプログラムを構築・提供し、子どもたちが循環を体感できるようにしている（図 1）。あわせて、子どもたち

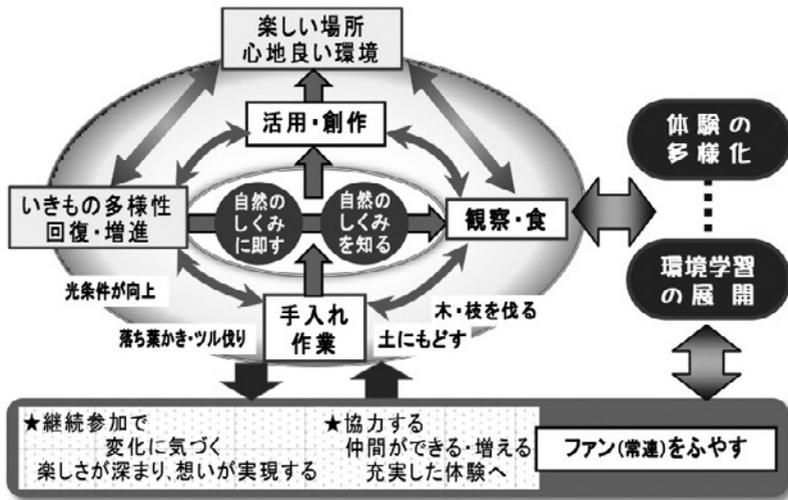


図 1 森の循環の思想に即したプログラム展開

ちの体験を大人たちが支援するしくみも創り上げてきている。

(2) 「自然あそび教室」プログラムの大切な視点とねらい

1) 使うことが手入れにつながる

例えば、リースの材料を確保するために林縁のツル伐りを行い、また、林床の常緑樹等を伐採して草木染めを行う。子どもたちは、「採取→リースづくり・草木染め」という一連の活動を通して、適度な働きかけが森林の光環境等を改善し、持続的な恵みの獲得につながることを考えるようになる。

2) 探すことが観察眼と集中力を高める

虫探し等、何かを探し出すことは子どもにとって本能とでも言える楽しみであり、自ら発見することは大きな自信になる。中でも集中力が増すのは、「探して食べる」時だ。椎茸を栽培し、収穫して食べる。秋にはシイの実を集めて“どんぐりクッキー”を作り、食べる。「探して育てる」ことも行う。コナラ、アベマキ、ツバキ等の実を探し、苗木を育て、植える。それは、森の再生につながる。このように場所や視点・焦点を変えることを促し、「つながり」や「しくみ」がわかるよう仕掛け、知的満足をもたらしていく。

3) 繰り返して経験知を獲得する

「ハイキング&植物・野鳥観察」、「草木染め」、「探検&昆虫観察（昼・夜）、キノコ観察、動物観察」、「川遊び&水生生物観察」、「星空観察」といった、



写真1 探検中に倒木をみつけて観察。なんで倒れたんだろう？キノコの役割は？

1年を通じた体験で、季節や時間による違いや生きもののつながりを発見する。毎年同じ時期に同じ観察やものづくりを行うと、違いや変化に気づき、その理由を見つけ出せるようになる。作業・創作の繰り返しは、知識や技術を向上させ、視点を広げ、深める。そうして得られる「経験知」が、自然を読み取る力を向上させ、生きる力を養うのだ（写真1）。

4) 自然に育まれた文化を体感する

宝が池周辺には、かつての環境利用の様子を物語る遺跡が多くある。プレイパークを取り巻く山には、五山の送り火「法」の場もある。しかし、送り火で使うアカマツが地域で調達できなくなったことを知る。一方、尾根では、かつて柴材として使われていたコバノミツバツツジの花のトンネルを楽しむことができる。地域の個性・文化としての人と自然の関係性を体感する絶好の場として、周辺環境全体を活用している。

5) 森を育てる、再生する

宝が池の雑木林は、2011年より著しくなったシカの食害やナラ枯れにより、様相が激変した。こうした状況に対応して、この森を守り、次世代の森を育てることをめざした実践的なプログラムも始めている。森の変化、生態系への影響、土砂流出や災害への懸念について気づき、樹木の保護や、苗木の育成・植栽といったプログラムにつなげていく。

6) 視点の広がり・発展を導く

経験を積み重ねることによって知識が深まり、技術が上達し、より複雑で複合的な思考に至るよう、段階的にプログラムを変化させていくことを心がけている。運営側には、身近な空間から日本、世界へと意識を広げていけるよう手助けしていこうとする意識が必要だ。そうした働きかけが、人間の生活や行動と自然環境との関係や影響といった、関わりが見えにくい事象を捉える力・想像力を高めていく。

7) あぶないを知り、予測する力をはぐくむ

「危険への対応力」を身につけることは特に大切だ。「危険を前もってなくすのではなく、どのような危険の可能性があるかを伝え、自分自身でそれに気づくこと」、「不必要に怖がるのではなく、危険の程度を生態とともに理解し、どのような行動を行うべきかを知ること」こそが重要だとの考えをスタッフで共有し、子どもや家族に伝えている。

基本的に、スズメバチやムカデ、マムシ等の危険動物の殺処分は行わず、ハゼやウルシ等のかぶれをもたらす植物もできる限り除去しない。まず、人の集まる場所の近くにその生息環境をつくらないように留意し、出現した場合は人を近寄らせず移動させる。また、危険を回避するための服装の選び方や身の動かし方を伝える。そうすれば生態の観察対象にさえなっていく。

3. プレイパーク・コミュニティの形成

(1) 世代を越えた体験の共有

自然あそび教室を含む宝が池プレイパークの運営は、理念を共有する中学生からリタイア層までの幅広い年齢のボランティアスタッフで支えられている。小学生時代をプレイパークで過ごし、中学・高校生になってスタッフとして参加し続ける子どももいる。

自然あそびに参加する子どもたちは、遊びの「先輩」であるスタッフに誘われ、自然の魅力に気づき、もっと知りたくなる。そんな子どものニーズに対応するため、NPO等とも連携して専門性の高いスタッフに来てもらい、正確な知識を伝えられるようにしている（写真2）。現在、約20名の方が



写真2 「先輩」から虫の世界を学ぶ

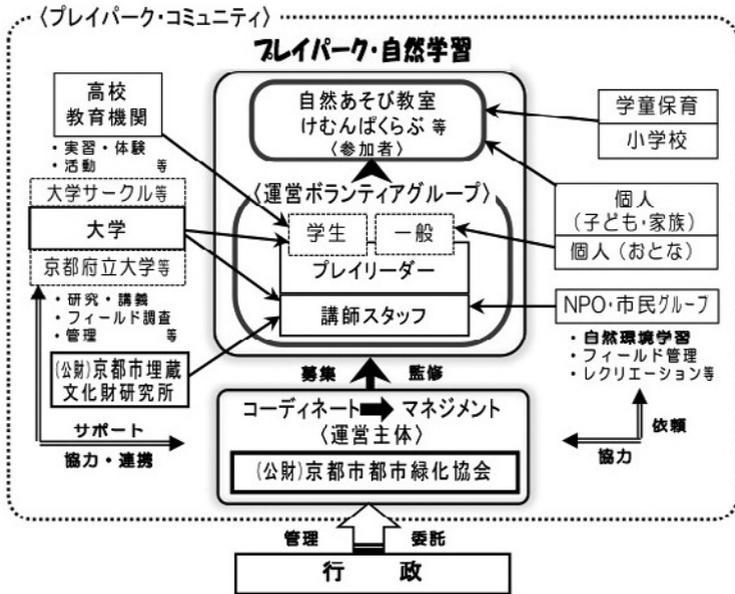


図2 宝が池プレイパークの運営体制

一般的な活動でのボランティアを、10 数名の方が講師を担ってくれている。このようにして広がった人のネットワークがプレイパーク・コミュニティを形成し、そのコミュニティがより豊かな体験の場を創り出していく (図 2)。

子どもの遊びのサポートを目的にボランティア参加を始める学生のほとんどは、当初、自然との接点を持っていない。子どもたちと一緒に楽しみながら、研究者や専門性の高い知識を持つスタッフと過ごすうちに、なんとなく自然の知識や接し方を身につけていく。子どもたちに限らず、この「なんとなく」がとても大切だ。「なんとなく」、「気がついたら」といった感覚の発生は、継続的な活動の成果である。

(2) 大学教育との連携

自然あそび教室を実施する上で、大学と連携し、学生実習の一環として雑木林の植生管理も行ってきた。まずは、園路づくりから始め、プログラムの展開にあわせて林内を面的に利用できるよう管理範囲を広げていった。プログラムと森林管理を連動させるためには、関係スタッフの基本知識の習得、

森の状態に関する最新情報の共有、林内で活動と一緒にできるボランティアスタッフの充実が必要だ。宝が池周辺の森林を研究や教育の場としている大学との連携は、プレイパーク活動を維持するための要となっている（図2）。

(3) ナラ枯れ・シカ食害を契機とする市民活動の広がり

ナラ枯れやシカ食害が顕著になるに伴い、立ち枯れ木の倒木や落枝の危険性が増し、シカが食べ尽くして裸地化した林床からは土砂が流出するようになった。危険で貧弱な森となった林内では、子どもたちが安全に豊かな体験を重ねることが難しくなった。

これに対応する動きを創り出すことをめざし、まずは、その現状や要因への理解を広げるための大人向け学習会を行うこととした。継続的に実施する中で、2014年には学習会に参加してきた有志によって「京都宝の森をつくる会」が発足し（会員数約30名）、森の再生に向けた活動が始まった。その活動の一部は、自然あそび教室とも連動し始めている。

(4) お父さんの登場

プレイパークでは「けむんぱくらぶ」という、5歳までの幼児向けの自然あそびの日を設けており、毎年約40組の親子が1年を通し参加している。「森の幼稚園」のようなものだ。そのメンバーのお父さんの中には、森が劣化し



写真3 遊び場づくりにつながる森の整備に力を発揮

てきている現状を知り、子どもたちの遊び場を取り戻そうと森林の管理作業を担ってくれる人が現れている（写真3）。立ち枯れ木を伐ったり杭を打ったり、森で作業するお父さんを見る子どもからは、「おとうちゃん、かっこいい!」、そんな言葉も飛び出す。お父さんはヒーローとなるのだ。子どもたちは、お父さんが働いている様子を見て森でのルールも学んでいく。その周りで探検し、虫探しやクラフトをして遊ぶ。お母さんはアウトドアクッキングを楽しむ。ここで見られる「遊び」と「仕事」が同居する風景はかつての里山でみられた姿の一つであり、復元目標としてきたものである。

4. 「プレイパークの森」から「宝が池の里山」へ

(1) 「宝が池の森」保全再生協議会の設立

里山が放置され人が入らなくなると以降、子どもたちだけで裏山に入って遊ぶことが難しくなった。「親が子どもに付き合える時間＝子どもが自然の中で遊べる時間」といった構図になってしまっている。加えて、自然の中で遊び方、過ごし方を知らない親も増えている。

このような社会で、子どもだけで自然の中で遊ぶことができる宝が池プレイパークは、とても大きな意味を持つ。親に里山の使い方・過ごし方を伝えていくための場でもあり、「けむんばくらぶ」は森で作業をする人を増やす機会ともなっている。荒れた森を再生していこうとする「京都宝の森をつくる会」も生まれた。森からの恵みを持続的に享受できる森づくりを行おうとするコミュニティが、子どもたちを中心にプレイパークに集まった人たちによって形成されてきている。ただ、この森を里山として利用してきた地域の人のつながりは、まだ弱い。

宝が池公園と一連の森の裾野にある集落で暮らしてきた人たちは、送り火等の地域文化を伝承する人たちだ。森林を利用していた頃の記憶も残っている。プレイパーク活動を、こうした地域の人たちから見守られつつ、学びを得る活動としていくことが、次の目標だ。

一方、その地域の集落では放置されて大木化したシイやナラ枯れの木が倒れたり、太い枝が家屋の上に落ちたりする危険性が増してきている。地域内にはこうした事態を何とかしたいとの思いがあるものの、森林は市有地と民

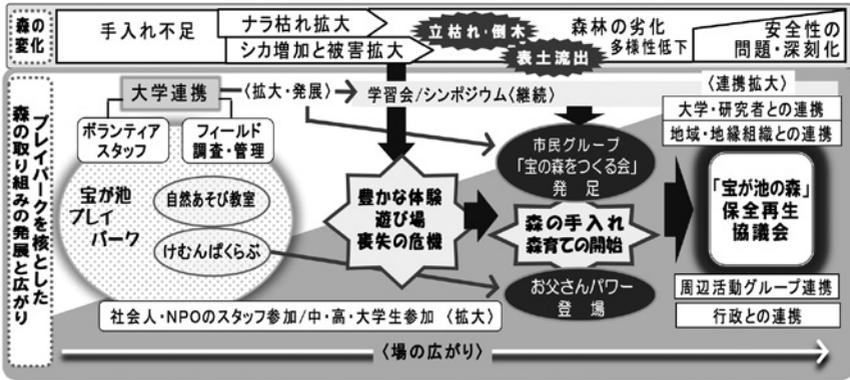


図3 「プレイパークの森」から「宝が池の里山」活動への発展

有地で複雑に構成され、また、多くの法規制がかかっているため、どのように対応し、どのように森に関わっていくべきかがわからず、途方にくれる状態となっている。

このようなことから、めざすべき森の姿を地域の人たちとも一緒に考え、ビジョンを共有し、そして、森の管理を協働で行って行くプラットフォームとして、『宝が池の森』保全再生協議会を立ち上げた(図3)。協議会は、地域の自治組織、子どもの楽園の指定管理者、京都宝の森をつくる会、隣接する深泥池で保全活動を行っている団体、左京区内の大学や関連学会の研究者、宝が池公園や周辺森林の管理者である京都市で構成されている。

(2) 新たな里山の創造に向けたビジョンづくりとマネジメント

子どもが安心して遊べる森づくり、地域の人たちが安心して暮らせる森づくりを推進していくためには、宝が池の森全体を見て、異なる構造を持つ林分の配置方針とその活用方法について、明確なビジョンを設定・共有し、実現に向けたロードマップをつくる必要がある。

「宝が池の森」保全再生協議会は、京都市および地域が所有する宝が池の森の将来について、地域住民、市民、研究者、行政、子どもの楽園運営者等が意見交換を行うための開かれた場だ。私自身は、「プレイパークにおける遊び場づくりや自然学習を通して森林環境への意識を高め、宝が池全体の森林管理につなげていくこと」を目標にマネジメントを行ってきた。協議会が動き始めた今、ようやく次のステップに踏み出せるようになったと感じる。

これから、将来ビジョンについて合意を図った上で行政がプランを策定し、関与者が役割分担しながら森の再生・維持管理を行っていきける、自律的な協働組織になっていくためのマネジメントが必要だ。

5. おわりに一安心して楽しめる里山をどんな地域にも

私は、宝が池プレイパークの運営と並行して、大阪府枚方市穂谷の民有地の里山でも継続的に活動している。「環境省・モニタリングサイト1000」のコアサイトであり、「にほんの里100選」にも選ばれている所だ（グリーンパワー2014年12月号／参照）。ここでは1年に1度、総合学習として、地元小学校の5年生の子どもたちが訪れる機会がある。1年生から畑で収穫したり、古老の話を聞いたりして学習を重ね、5年生で里山体験を迎える。

私たち市民グループは、そうした学校活動も支援している。子どもたちは、休耕田を利用した活動フィールドで生きもの探しに大はしゃぎし、竹やぶでの竹伐りにもチャレンジする。こうして里山活動の楽しさを経験すると、里山に続けて通いたいという子どもたちも現れる。そのような子どもたちをなるべく受け入れたいものの、リスク管理の側面から、一般的には親と一緒に参加することが条件となってしまう。民有地での市民グループの活動では、万が一の事故に対して責任を負いきれないためだ。全国各地の里山で多くのグループが活動しているが、子どもたちだけでは遊ぶことができない所がほとんどだ。親と一緒になくても子どもだけで遊び、楽しめる里山にしたいという強い想いを感じてきた。

今、宝が池プレイパークではプレイパーク・コミュニティが形づくられ、一定年齢以上であれば子どもだけで体験を重ねることができるようになっている。また、大人向けには、「宝が池連続学習会」や「宝が池シンポジウム」等を継続的に行ってきた。その結果、「宝が池の森」保全再生協議会が設立された。こうした様々な取り組み・仕掛けによって、開かれた場で様々な課題を浮き彫りにし、共有できるようにまでなってきた。

宝が池プレイパークのような自然あそびと学びの拠点が、民有地での里山活動の場にもできれば良いと思う。そのためには、行政が支援して民有地里山の一画に公的なプレイパークを設置すること、それを核に市民グループ、

地域の人々、行政等をつなぎ、連携の取り組みを広げていくためのマネジメントを担える人を配置することが必要だと思う。遊びや自然学習を通して森林環境への意識を向上させ、そして、協働による森林管理に高めていく活動が、日本各地に広がることを願っている。

〔参考文献〕

- 野田奏栄（2013）雑木林型公園での利用と管理運営のあり方、プレイパーク運営から森林管理への展開をめざす「京都・宝が池公園」の事例から、ネイチャーおおさか・スタディファイル no.5（CD版）
- 野田奏栄・小川美知（2014）「宝の森」で育つコミュニティ宝が池公園子どもの楽園プレイパーク事業、公園緑地 75(1)、15-17.



野田 奏栄（のだ・かなえ）

公益社団法人 大阪自然環境保全協会理事、公益財団法人 京都市都市緑化協会非常勤職員。京都府立大学住居学科卒業。住宅設計、都市計画・緑地計画コンサルタントを経てフリーに。名古屋在住時、市民参加型の里山公園づくりに携わり活動を開始。一級建築士、技術士（都市および地方計画）。1967年生。
